

友釣り DNA と、カワウ対策

大内山川漁協では、令和5年5月13日に無事アユ釣りが解禁となりました。初日より、多い方では1日あたり100尾程度の釣果が得られるとともに、大内山川の上流から下流、どのポイントに行っても10から30尾程度は釣れるという、とても嬉しい釣り環境を作ることができました。SNSが充実した社会ですから情報は瞬く間に流れ、どのような状況なのかは少し検索して頂ければ知ることが出来るかと思いますが、中の人目から見ても、今年は上々の更に少し上かな？という気がします。

このような結果が得られたことは、準備を進めてきた私たちにとっても大変嬉しいことであり、何処のポイントに行っても多くの方が綺麗な環境で釣りを楽しまれている姿は、「感無量」です。

<https://news.yahoo.co.jp/articles/4d0516d024252bf254442c01f2cfe94210ae70c6>

さて今年、なぜ釣れているのかを少しだけお話ししておきます。

1. 友釣り DNA

ご存じの方もいらっしゃるかと思いますが、

「友釣りで釣れるアユと、友釣りでは釣れないアユがいる」

アユの縄張りについて、追いの強さ、攻撃性が異なるようです。

更に、実験内容の詳細は省きますが、

「友釣りで釣れるアユと、友釣りでは釣れないアユでDNAに差が出る」

という研究結果があるのです。

もし追いの強さが100%環境依存で後天的に性格が決まっているのであれば、「友釣りで釣れるアユのグループ」と「友釣りでは釣れないアユのグループ」では、DNAのバラつき具合も同様になるはずですが、しかし実際には、この両方でDNAに差があるようです。

今年の大内山川での放流アユは、全数が、

「友釣りで釣れるアユのみで交配した種苗」です。

放流魚の全数で実施したのは、実はかなりの冒険でもありますが、

私たちが種苗生産をお願いしている宮城鮎工房さんの類稀なる探求心や、遠路はるばる宮城からやってきたと思えないほどの活性がとても高く良質な種苗が、最高の釣り環境を作る一助となっていることは、疑いようがありません。

この結果は、お越し頂ければ実感して頂けるかと思いますが。

また、今年は天然遡上の始まる時期が例年よりも早いことに加え、去年よりかなり数量が多いことから、長くアユ釣りが楽しめるかと思っています。

2. カワウ対策

実は去年、アユの種苗放流直後にカワウが1回あたり80から100羽程度飛来して、折角放流した種苗が大量に食べられるという光景を我々は何度も目の当たりにし、放流アユのうち何割かが確実にカワウの餌になってしまいました。もちろんカワウ対策は実施しており、去年は総延長22.6kmもの黒いナイロンテグスを張って対策をしたのですが、未対策であったポイントでことごとくカワウにやられてしまいました。人間との知恵比べです。

その教訓から、今年は放流が始まるよりも前に、基本的に全てのアユ放流地点で総延長35km程の糸張りを行い、どの地点にカワウが飛来しても着水しにくい環境を準備しました。その結果、今年の放流後に大内山川で確認されたカワウの群れは20羽程度で、数羽を散発的に見掛ける程度にしかカワウが来なかった、という結果となりました。

他地域の視察や情報収集や、水産研究・教育機構中央水産研究所の坪井潤一氏を始めとする多くの有識者の方々のご指導を基に、いかに良い釣りが出来るかを探求して来ましたが、普段からの組合員や地域の方々の清掃活動の成果もあり、

「綺麗な川で、良い釣りが出来る」

この漠然とした壮大な目標を、ついに達成できたのではないかなと思います。

皆様のお越しをお待ちしております！

5月18日 中の人